

三三三三六番

鳥とりが音ねの かしまの海うみに 高山たかやまを 隔へだてになして
 沖おきつ藻もを 枕まくらになし 蛾羽ひむしはの 衣きぬだに着きずに
 いさなとり 海うみの浜はま辺へに うらもなく 臥ふしたる
 人ひとは 母父おもちちに 愛子まなこにかあらむ 若草わかぐさの 妻つまかあ
 りけむ 思おもほしき 言こと伝つてむやと 家問いへとへば 家いへ
 をも告のらず 名なを問とへど 名なだにも告のらず 泣なく
 子こなす 言ことだに問とはず 思おもへども 悲かなしきものは
 世よの中なかにそある 世よの中なかにそある

反はん歌か

三三三七番

母父おもちちも 妻つまも子こどもも 高たか々たかに 来こむと待まちけむ
 人ひとの悲かなしさ

三三三八番

あしひきの 山やま路ぢは行ゆかむ 風かぜ吹ふけば 波なみのささ
 ふる 海うみ路ぢは行ゆかじ